
夢人荘の人々（前編）

森 イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢人荘の人々（前編）

【Nコード】

N7567S

【作者名】

森 イツキ

【あらすじ】

小説家を目指す女の子のお話です

これは、私の成功物語だ。

と、いつても、現時点で私は何の成功も収めてはいないので、あくまでも成功する予定の物語、となってしまうのだけでも。

たとえば、人生が一度きりのものではないのだとしたら、私ではない他の誰かの為の人生を生きてみてもいいかもしれない。一般的な親が子に望むような人生もいい。普通に就職し、ある程度お金が貯まって生活の目的が立った時点で結婚し、子供は男の子一人に女の子一人が理想的。子育てに追われながら、家計のやりくり掃除洗濯もちろんご近所付き合いも欠かさすわけにはいかないだろう。日々忙しく、近所のスーパーの特売品を狙って町内を奔走するのも、まあそれはそれでいいのかも知れない。日本のあちこちで展開されている、そんなありふれた人生を私は全く否定しない。

だけど、人生とは誰にでも等しく一度しかない。しかもいつ終わるかわからない。その一度きりの人生を、自分が思うままに生きられないのだとしたら、そんな不幸なことってないと思う。

誰にもその一度きりの人生の自由を奪う権利なんてない。それは、自身に与えられた、唯一にして最大の権利なのだ、と私は思って二十一年間生きてきた訳なのだ。まあ、ずっと何がしたいか分からないまま、迷いながら悩みながらここまで来てしまった感も否めないけれども。

今の私には、心から叶えたい確かな夢がある。その夢を実現するために、私は家を飛び出した。

容赦なく頬に突き刺さる早朝の風は無慈悲で冷たいが、何故か無性に身体が熱い。新しい生活を前に脳が興奮しているのか、それとも単に駅まで走ってきたからだろうか。

駅の切符売場の前にまでたどり着いた。財布から一万円札を取り

出し、目的地までの片道切符を買った。

片道、という響きが、揺るがなかったはずの私の決意をぐらつかせる。私は自分の頭によぎった迷いを振り落とすかのように、首を二、三度強く横に振った。早朝であることに加え、四国の片田舎ということもあり、人気の少ないJRの駅の構内で、なにか私だけがひどくせわしない気がする。真っ白な歯の中にひとつだけ金歯が挟まっているような、嫌な目立ち方。なんかそんな感じた。

高ぶる感情を無理に抑えつけることは難しいみたいだ。なんといつても今の私は、今までの私が経験したことのない私なのだから。これから何が起こるかなんて、分からなくて当然なのだから、それで落ち着けと言うほうが難しい。

あまりかさばらないようにと、荷物は極力少なめにしたつもりだけど、それでもやっぱりかさばってしまう、何泊する気なのだとつっこまれそうな大きなショルダーバックを抱えた私は、一体周囲の目にはどう映っているのだろうか。旅行にでも行くのだろうかと思われているのだろうか。私が内に秘めた決意など、誰も気づく訳もない。そんな当たり前前の事実が、私の心をいくらか軽くしてくれた。たとえば私が失敗したって誰も困らない。もともとそんなに誰かから大きな期待をされているわけじゃない。人より頭がいい訳でも、運動が得意なわけでもない。ただ人より空想にふけることが好きで、人を楽しませることが好きただけだ。その特徴を存分に発揮できる職業を目指して、私は旅立つのだ。

駅の改札に切符を通した。切符は「んべえ」と私の数歩手前の改札口にひよっこり顔を出す。私はそれを躊躇なく抜き取り、目的地行きの電車がやってくる、三番線乗り場までかつかつ歩いた。中学の頃から使っている愛着のあるシルバーの腕時計に目をやる。電車がやってくるまであと五分。なにかもがうるさいくらいに静かだった。

私は夢を叶えるために東京に行きます。

「本気で言ってるの？」

と、私が真顔で言った言葉を智久は真顔で返してくるので、あえてへらへらした表情で私は、本気ですから、と返した。ちなみに智久というのは、私の彼氏だ。同じ大学に通う、何の平凡もない、どこにでもいる、サッカーとおっぱいが好きな男の子だ。

「馬鹿だ」

智久は、たとえば地面に落下してしまったアイスクリームとか、くじ引きのはずれの景品のポケットティッシュをもらった時のような、とても残念なものを見るような眼で私を見た。

「言つとくけど、本気だから」

私はきつ、と音が出てでもいいくらいには、智久を睨んだ。内に秘めた決意を思い切つて打ち明けた初めての人に、こうも頭ごなしに否定されるとは、出鼻を挫かれたもいいところだ。まあ、大体予想はしていたけども。

「だからって、わざわざ東京にまで行かなくてもいいと思うけど」「甘い。甘過ぎる。夢を叶えるには東京なの。下積みは東京でしなくちゃ意味がないの」

智久はいつの時代だよ、とでもいいたそうな顔で、あー、もうと言いながら頭をくしゃくしゃと掻きむしった。

とにかく、智久に何をどう言われようが、たとえ馬鹿だと罵られようとも、私は絶対に決意を曲げるつもりはなかった。これは相談ではなくてただの報告だ。行ってきます。簡単に言つと、そういうことだ。

「どうしても、行くの？」

「うん」

私は即答した。

「じゃあ、しばらくは会えなくなるの？」

智久がすねたような表情で私に問う。そんな寂しそうな顔をされると急に心が痛む。道端にぼつんと捨てられていた段ボールの中を覗きこんだら、捨てられていた毛むくじゃらの子犬が愛くるしい

るんだ瞳で私の眼をじっと見つめてきたかのような、理不尽な罪悪感に駆られる。

「んー、それは、まあ、やっぱり今までみたいには、いかないだろうね」

私はそう淡々と口にした。この話題に関してはあえて感情を込めないようにしようと心に決めていた。クールに、あくまでもクールに。

後ろ髪を引かれる思いがないわけじゃない。失うであろうはずのもの大きさも分かっているつもりだった。それでも、やるしかないのだ、私は。

「別れ、たい？」

私は恐る恐る口にした。こんな勝手な女が彼女で、智久が幸せになれるはずもない。それくらいの自覚はちゃんと私にはある。

「俺は」

とつさに言葉を返そうとして、すぐに智久の口が固まる。まるで言語を忘れてしまったかのように、智久の目はうつろんで酷くおぼつかない。言いようのない、深く、暗い、不安の波に怯えているようだった。

「別れたくは、ない」

そう言っただけは、静かに、大きく息を吐いた。

「私もそれはそうだよ。勝手だけど」

あまりに矛盾に満ちた私。じゃあ俺から離れるなよ、なんで突然そんな遠くに行ってしまうんだ、身勝手な女だな、と言われても、ごもつとも、としか言えない。

「じゃあ、せめて香川にしてよ」

「・・・え？」

なんとまあ、ここにきて折衷案！智久が提案したのは、なんと隣の県で折れてくれ、というちゃんと折りきれているのかどうか甚だ怪しい折衷案である。それまでの張りつめた場の空気が一変し、なんとも滑稽な空間に様変わりしてしまったことは言うまでもない。

がたごとと、国会のごとく激しく揺れる車内で、智久が私に言ったその言葉がゆっくりと脳内で反芻される。あれは本心だったのか、それともただの冗談なのか。その本意も図りきれないまま、ただただ馬鹿正直に、とりあえず香川に行くことにした私って一体。こんなところで決意が揺らいでいるようで、果たして夢なんて叶うのだろうか。

私は、小説家になるのだ。いやマジです。

なんで小説家になるのに上京しなければいけないのか、という質問には私はこう答えるしかない。夢を叶える場所は、東京だと昔から相場が決まっているのだ。

こんなにもたくさんの人達に囲まれているというのに、私のことを知っている人が一人もないという事実、今さらながらエライところに来てしまったなあ、と、急に現実が目の前に迫ってきたような気持ちになり、いかんいかんと私は首を横にぶんぶん振り、後ろ向きでくだらない思考を振り落とす。

やってやるうじゃんか。逆に面白くなってきたぜくらいの気持ちでいかないと、この街では到底生きていけない。ましてや成功することなんて夢のまた夢だ。

見てろよ。東京。私は絶対に、負けない！

とかいう台詞を現地ですべて吐いてみたかった。私が踏みしめるこの大地は、さぬきうどんと私の敬愛するあるマンガ家さんの出身地で有名な香川県は高松市である。私は、香川で夢を叶えようとしているのだ。カガワディアドリーム。かなり言いにくい。

ちょっとした小旅行にでも来ているかのような気分だ。なにせ隣の県だ。高速を使えば二時間半で来ってしまうのだ。なんともいえない半端感。ある意味私にはお似合いなのかもしれない。

とりあえず寮に行こう。修行といえは寮だ。私はどうも形から入ろうとする癖がある。

便利な時代になったもので、目当ての物件はインターネットでさ

くつと検索できるご時世だ。市内ではあるが比較的閑散とした郊外に位置した静かで落ち着ける街。何も無いようで、そこにしかない何かがあるような、そんな場所を選んだつもりだ。

ネットで印刷した地図を頼りに慣れない土地を歩いて見るけれど、一向に目的地に着く気配がない。

夢人荘、という名の私が住む寮は、二階建てのこじんまりした造りで、築二十年だが、写真で見ると限りそれほど古臭さは感じない。フロアリングの八畳一間の部屋にキッチンが四畳半。バストイレ別なのは有り難いが、ベランダは気持ち程度にくつついていただけだ。とりあえず洗濯物が干せないことはなさそうなので問題なし。

夢人荘は、一階に三部屋、二階にも三つ部屋があるが、一階の一番奥の部屋は大家さんが住んでいるらしい。不動産会社の人から聞いた話によるとその大家さんは、それはもう素敵な人だそうでお金に苦労している若い人に相場から見てもかなり安い賃金で部屋を貸しているどころか、希望があれば朝、晩の食事まで作ってくれるのだそうだ。素晴らしい大家さんだ。

ただ、そんな破格の条件の寮（厳密にはアパートだが、私は頑なに寮と呼ぶことにこだわっていきたい）だが、入居には一つ条件がある。

夢を追いかけている人以外は、お断りさせていただきます。という、なんとも不思議な条件なのだ。

そんな訳で正に今、夢追い人の称号を欲しいままにしている私は条件を完璧にクリアーしているのだ。というかその基準はどう判断するのか、怪しい、かなり怪しい。が、破格の家賃に魅せられた私にはそんな問題は最早ないに等しい。

「痛っ」

ぶつぶつと考え事をしながら道の角を曲がった瞬間に何かにぶつかった。結構勢いよくぶつかってしまったので、私は尻もちをついてその場に倒れてしまった。

突然のことに気が動転したが、はっと気づいて正面を見ると、三

十代半ば程の、ひげをぼうぼうに生やした、私とさして身長の変わらない小柄な男が、まるで鏡写しのように、同じ体制で尻もちをついていた。

「ど、どこ見て歩いてるんだ、お前は」

男は小柄な体型の割に態度は大きかった。背丈と態度は比例しないのかも知れないけど、それはどこか滑稽な印象を私に与えた。こちらに一方的に非があることでもないと思ったけれど、それでもとりあえず謝っておくのが人の道だと思い、殊勝な私は平謝りするこ
とにした。

「ご、ごめんなさい」

と私が申し訳なさそうな表情を浮かべながら謝罪すると、男はむくくと立ち上がり、太ももの辺りをぱんぱんと叩き埃を払いのけ、酷くうんざりした様子でこちらを睨んでいた。

「全く、気をつけるよ。俺は忙しいんだ」

知らんわ、と言ってやりたかったがここは黙ってうつむいていた。

「ん？あ、ああ、あれ？」

何故か男が間の抜けた声を出してうるたえている。

「おい、お前、俺の茶封筒知らんか？」

「え？」

男はそう言った傍から周囲を執拗に見回りだし、ひどく狼狽した様子であった。何か落とし物をしたのだろうか。

「あの、何か落とし物でもされたんですか？」

若干腑に落ちない点はあるが、丁寧に敬語で質問した。男は焦った様子で言葉を返す。

「俺が書いた原稿、新作、今日送らんと消印が。ヤバい、ヤバい！」

男は焦りまくっていた。原稿、ということはこの冴えないチビのおっさんは小説家が漫画家か何かなのか。いや、そんなプロの人間が放つオーラは、失礼ながら全く感じない。それ以前にまず人に対する寛容さがない。物書きだか何か知らないがそもそも人間失格だ。だんだんと落ち着きを取り戻してきた私のお尻に、アスファルト

の感触ではないなにかが触れていることに今更気がついた。

慌てて立ち上がり、私がさっきまで尻もちを付いていた場所を確認すると、A4サイズの便箋がくしゃくしゃになってうなだれていた。

「あー！ー！ー！」

鼓膜に悪影響満載のうるさい声の先を見やると、男が大口を開けてこちらを指差していた。そして私の目の前にほとんど走っているくらいの早足で来たかと思えば、私を物を扱うように払いのけた。私は無抵抗に吹っ飛ばされ、マンガみたいに壁に身体を打ちつけた。ぐええ、というおよそ女の子が発してはならないような声を出してしまった。

「はあああああ．．．」

男は便箋を手に取り、おもむろに封を開け、中から取り出した白い紙、恐らく原稿だろう。それを確認しているようだった。男の顔はみるみるうちに青くなってそろそろ入院したほうがいいのではないかというくらいにまで青くなった。その理由は私の距離からでも確認できた。原稿がくっしゃくしゃのぐっちゃぐっちゃになっていった。

「オレの、二か月間の苦勞が。いや、構想含めれば1年3ヶ月．．．
つぐ、ふう．．．」

男は泣いていた。こんな真昼間に大の男が道端で泣いている。通りすぎる人々がひそひそ話をしながら、訝しむような顔つきでこちらを見ている。あろうことか男だけでなく、私も見られている。やめて、私を巻き込まないで！と叫びたくなかったし、この男をこころゆくまで遠くに蹴り飛ばしてやりたくなったりと、様々な感情が生まれてきた。とりあえず早く私を開放してほしい。何故香川にきて早々こんな面倒なことになってしまっているのだろう。バツクは重いし本当ついてない。

男は依然、しわくちゃの原稿を抱えたままぶるぶるしている。

「あ、あゝのゝ」

私はありつただけの勇氣と根氣と優しさを持って男に話しかけた。

「……」

「私、もう行つてもいいですか？ちよつと用事が……」

瞬間、男が私の方を見た。その目は涙と怒りが無い交ぜになつてぎらぎらと輝いている。

「お前、この原稿、どうしてくれる」

「は？」

「俺がどれだけの苦勞を掛けてこれを完成させたと思つてるんだ！」

「え、ええええ？」

まさか上香（上京の香川バージョンと私が今名付けた）初日にこんな面倒事に巻き込まれるとは予想外だった。どうすればこの場を凌げるのだろう。誰か助けて。ともひさくと彼氏の名前を呼びたくなるが今の時間は智久は大学に行つていて時間だし第一ここは香川だし助けに来てくれるはずもないしそもそもこつちに知り合いは誰もいない。

「弁償しろ」

男は、私の横に来て、しわくちやの原稿を便箋に入れて私に渡した。私は条件反射で原稿を受け取ってしまった。こんなもの、私は何の興味もないのに。

「俺はこの大作を足掛かりに漫画家デビューする予定だったんだぞ！それを、お前、お前の尻が。畜生、畜生！」

尻言つなこのヒゲもじゃ野郎。定職にもつけなさそうな顔しやがつて。私のイライラはほぼ頂点に達していた。私は大きく息を吸つた。

「大賞賞金二百万でアシスタント雇つて、上京して、いい部屋住んで、敏腕編集者と打ち合わせして、高級料亭で毎晩奢られて、ゆくゆくは週刊作家として華々しく……つて、おい、お前、聞いているのか？」

「痴漢よ！皆さ〜ん！私、この鬚面にお尻触られました！誰か捕まえて〜！」

私は力いっぱい叫んだ。香川じゅうに届いてしまえばいくらいの気持ちで叫んだ。

「ば、おま、ば、何言ってる！」

男は額から汗をだらだら滲ませている。焦り。不安。危険。恐怖。罰金。服役。そんな単語が男の脳裏をかすめていることだろう。

「おい、痴漢が出たらしいぞ！」

「警察、警察呼べ！」

声を聞き付けた周囲の街ゆく人々がこちらの状況に気づいたようだ。

「助けて！こつちに痴漢がいます！」

私はさらに叫んだ。

「お、お前、覚えとけよ！」

男は私に向ってそう捨て台詞を吐くと、一目散に逃げ出した。その数十秒後に、丁度市内を巡回していた警官や、近所のおっさん連中達が現れ、さすがにちよつと可哀想なことをしてしまったかも知れないと思った私は、男が逃げて行った方向とは違う方向を指差し、あつちに逃げました、と彼らに告げた。

そして誰もいなくなった。

さあ、早く寮に行こう、と私は頭を切り替えることにした。

地図を片手に歩くこと小一時間、さつきから同じような道をぐるぐる回っているような気がする。もうここまでできたら聞くは一時の恥だと思い、近くを歩いていたら人あたりの良さそうなおばさんに道を尋ね、丁寧にアパートまでの道を教えてもらった。まともに歩けば私が降りた駅から二十分くらいしかかからないらしく、少し気恥ずかしい思いがした。

言われたとおりに歩を進めると、ものの十分程で事前に印刷していたアパートの写真と同じ風体の物件が視界の奥に姿を見せた。やっぱり周辺をぐるぐるしていたみたいだ。こんなことならもっと早く聞いておけばよかった。

私は、ついにアパートの前にまで辿り着いた。ここが、私が夢を叶える場所になるのだろうか。それにしてはいささかみすばらしい気がしないでもないけど。

とにかく、私は大家さんに挨拶をしようと思ったのと、ここまで大分歩いてきたし途中変な男と一騒動あったこともあって早いところ部屋で休みたいというのもあって、早々と大家さんに部屋の鍵を貰いにいくことにした。

賃貸業者の人から事前に連絡が来ている筈なので、問題はないと思うけど、それでも少し緊張してきた。大家さんはどんな人だろうか。もし強面の無愛想なおっさんとかだったらちよつとやっていく自信がない。

手持ちのアパートの資料に書いてある大家さんの部屋番号を確認し、恐る恐るブザーを押すと、ピンポン、と甲高くチャイムが鳴る。次いで、とんとんとこちらに近づいてくる足音が聞こえる。緊張する。

ガチャ、とゆっくりとドアが開く。

「あら、こんにちは」

ドアの向こう側から出てきたのは、いかついおっさんでも、感じの悪そうなおっさんでもなく、そもそもおっさんでなかった。間違いないく美人の部類に入る、肩まで伸びたセミロングの髪が美しい、見る人に清楚な印象を抱かせる大人の女性だった。

年の頃は三十前後、といったところだろうか。全く嫌味らしいところがない、美しい顔立ちだった。私もこんな風な大人になれたらどれだけ未来に希望を持って生きていけるだろうか。

「大向美智さん、よね」

「あ、は、はいっ」

その美しい所作に同性なのに思わず緊張してしまう。そんなに初対面の人に緊張するタイプではないと思ってたけど、自分とあまりにもかけ離れたレベルにいるような人と話す時はやっぱり緊張してしまう。

「遠いところからよく来てくれたわね。私は、この夢人荘の大家の寺河由紀です。よろしくね、大向さん」

寺河さんは柔和な笑顔を添えて、とても丁寧に挨拶をしてくれた。その一つ一つの仕草が均整が取れており、なめらかで美しく、私はただ呆然と寺河さんの所作を眺めているだけだった。

「あ、いえ、そんな、全然」

落ち着かない様子の私を見て寺河さんが、幼い子供をあやす母親のような優しい笑顔を浮かべている。

「そんなに緊張しなくていいのよ。まあ、慣れない場所で一人暮らしですもの。どうしても気は張っちゃうわよね」

別に気が張っているつもりはなかったのだけど、寺河さんに言われるとそんな気もしてくる。何もかもを見透かされてしまっているようだ。

「とにかく、ようこそ夢人荘へ。お世辞にもきれいなところじゃないけど、住みよさは私の折り紙つきよ。なんてね」

そう言うと寺河さんは両の口角を吊り上げ、にこりと笑みを浮かべた。つられて私も笑ってしまう。天使のような笑顔だ。早起きだったり色々と疲れることもあってぼおつとした頭で、そんなことを思った。一時間ほど前に運悪くぶつかつた意味の分からない漫画家志望のむさい男のことなど、今は完全に頭の隅に追いやられている。寺河さんは、早速私を連れて夢人荘の二階の、私が住むことになる部屋に案内してくれた。部屋の前にまで着くと、ポケットからスベアキーを取り出し、鍵を開け、部屋の中を見せてくれた。実家から送った荷物はもう到着していて、部屋は私が入る前から結構ごちゃごちゃしている。整理するのが今からおっくうになってきた。

「これがあなたの部屋の鍵よ。203号室。もう荷物は届いてるから、整理が大変だと思うけど、引っ越しにはつきものだからね。今日は疲れてるだろうから、無理のない程度にゆっくりやるといいわ」

香川のお母さんか、あなたは。と言いたくなるくらい優しい言葉を掛けてもらって、私の単純な脳みそは、香川って良いところじゃ

ん、と思つてしまった。

「あ、ありがとうございます」

寺河さんは、何か分からないことがあつたらいつでも言つてね、と言つて、ドアをゆっくりと閉め、帰つて行つた。ふわりとした残り香がまだ部屋の中に漂っている。

もしかして、とても良い場所に引越してきたのではないだろうか、私は。

ただ家賃が安いのと、アパートの名前がいかにも夢を追いかける人を後押ししてくれるような名前だったので選んでしまったただけなのに。案ずるより産むが易しとはよく言つたものだ。

ガチャツ。

ドアがなんの前触れもなく勢いよく開いて、私は思わず肩をびくつとさせた。

「そうそう、忘れてたわ。これ、私の連絡先。はい」

と言つて寺河さんは電話番号とメールアドレスを書いた名刺を渡してくれた。

「基本は家にいるから、何かあつたらいつでも連絡してね。あと、そうね、晩御飯は絶対に家で作るようにしてるから、作るのがおっくうだったり、お腹が空いてたらいつでも食べに来てね。結構評判なのよ、私の料理。他の部屋に住んでる人達もよく食べに来てくれるから、他の部屋の人との交流にもなると思うし。皆個性的で、面白い人ばかりだからみっちゃんもすぐ仲良くなれると思うわ」

それだけ一息に言つてしまうと、寺河さんは、じゃあね、みっちゃんと、ぱたぱたと手を振つて、ドアを閉めた。いつのまにかみっちゃんという呼び名が定着していたことに気づいた。マイペースな人だな、と思う。でもなんか好きだ。

寺河さんから貰つた部屋の鍵を片手に、私は、私これから暮らす街を改めて眺めてみようと思ひ、ドアを開け外に出た。周囲を見渡すと何故か通路にバナナの皮が2〜3本落ちていたがこれは何か

の罨だろうか。壁面に目をやると、老朽化からなのか幾らか綻んでいるコンクリートの壁なのに、どこか温かみを感じるのは大家さんの人柄からくるものなのだろうか。

一度大きく深呼吸して、ゆっくりと街を見渡す。二階から見る景色は、絶景と言えるほどのものではないけど、落ち着いていて、どこか安心感がある。もしかしたら、ごちゃごちゃしてせわしいことが予想される東京よりも、この落ち着いた環境のほうが、良い小説が書けるかもしれない。

時間を忘れてしばらくぼおっとしていた私は、はっと気がつく。そうだ、部屋の片づけをしなければ。新天地の空気を味わっている暇はない。いや、暇はあるといればめちゃくちゃあるんだけども。とにかく、自分の部屋に戻ることにした。

私は、私の部屋に入る。事前に届けられていた私の荷物と、家具一式が、がらんどうの部屋に無骨に整然と置かれている。空気は外とほとんど変わらず冷たく、それが肌に心地よく届く。しばらく意味もなく、部屋の片隅で呆けていた私は、はっとして部屋に一歩足を踏み入れようとして、靴を履いたままだったことに気づく。

靴をいそいそと脱ぎ、整えることもなく玄関に散らかしながらフロアリングの床に足を乗せる。

ここが私の部屋。愛媛にいた頃は自宅から通っていたので、一人暮らしは初めての経験だ。一年半ほど通った大学にも休学届を出した。今後、場合によっては退学するかもしれない。ここで思い切っていきなり退学しないのは私の心の弱さの証明なのかも知れない。それに親に今すぐ退学するのだけは勘弁してくれと泣きつかれたからというのもある。私が頑固で、一度決めたことは絶対に曲げない性格であることを両親はよく知っているので、私が香川に行くことと決めた時も、案外すんなりと受け入れてもらえた。もしも自分が親の立場だったらもう少し止める素振りを見せるくらいのはするだろうなと思ってしまっくらいにすんなり、だった。だから、尚のこととおめおめと逃げ帰る訳にはいかない。

気持ち揺らぎそうになる時は、頑張れ自分、負けないで、とぐつと気持ちを高める。何に負けないのか、そもそも勝ち負けがあるのかどうかもよくわからないけど、とにかく、自分を奮い立たせるようにしている。こんな私でも結構人並みに折れそうになる時があったりするのだ。

三時間弱かけてなんとか部屋を、お客様が来ても大丈夫なくらいには片付けた。荷物はそれ程多くはなかったのだけれど、本棚やテレビ台や鏡の置き場所に四苦八苦し、ああでもないこうでもない配置を二転三転させているうちに時間が駆け足で過ぎて行った。

そんな訳でひと段落ついた頃に時計を見たら、ああもうこんな時間か、と感じたが、時間の経過に気づいた瞬間、お腹が空腹のサインを発しだした。

材料もないし、すぐに食べれるようなものも家にないので、とりあえずコンビニに行くことにした。確か、ここに来る途中にローソクを見かけた。正確には覚えていないが、ここから五分くらいだった筈だ。きつとここからでも看板が見えるだろうから迷うこともないだろう。私はとりあえず外に出ることにした。

何故かドアを開ける音が二重に聞こえた、と思ったらお隣さんが丁度部屋から出てきたところだった。香川に来て初日なのに、どこかで見覚えのある顔だった。

「あ！お前！」

男は私の顔を見るなり瞳孔が開かんばかりの勢いで血相を変えてまくしたてた。厄日か。

「お前、あの後俺がどれだけ大変だったと思ってるんだ！あれだけ全力で走ったのはそうとう久しぶりだ！学生自分以来だ！そもそも痴漢じゃないぞ俺は！」

一難去つてまた一難。まさかこちらに来て早々に、道の角でぶつかった、ちつさいおっさんが隣に住んでいるとは！なんて私は運が悪いのだろうか。いや、もうここまできたら一周回って運がいいのかも知れないとさえ思う。

「いい、いい運動になったでしょう？」

思わず口に出してしまっただがさして後悔もしなかった。この男に
なら何を言ってもかまわないだろうという、ある種の安心感が私に
はあった。第一お腹も減っているし疲れているので人に気を使って
喋る元気がなかった。

「私は今日引越してきたばかりで疲れてるんです。それにお腹も
減ってるんです！痴漢のことはもういいから放つといてくれません
？」

「だから痴漢じゃないって言ってるだろ！しかももういいからって
言うのは立場的に俺だろ！」

男は激昂していた。私はお腹が激減りしていた。

「じゃあ、どのみちもういいでしょう？」

「とにかく、これをお前、どうにかしろ！」

男はまだしわくちやになつた原稿の入った封筒を持っていた。私
はしぶしぶ受け取って中身を取り出した。私の尻にしかかれてしわく
ちやになつた原稿を必死で伸ばした跡がある。流石に賞には応募で
きそうにないが、なんとか読むには読めそうなくらいにはなってい
た。

元々小説はもちろん漫画もよく読む私は、素人の描いた漫画を読
むというあまりチャンスのないシチュエーションに少しは興味があ
つたので、しぶしぶながら男の描いた漫画を読んでみることにした。
マンガの内容は、まあよくある勧善懲悪のアクションものだった。
絵はおっさんが書いている割には今の若い人にもウケそうな絵だっ
た。内要は、正直いってまあああで、これはちよつと、という程悪
くはないし、そこそこ面白いような気もするが、いささかパンチ力
に欠ける感は否めない。もっとストーリーに力を入れて、コマ割り
も工夫すればもっと良くなるのに、と偉そうなことを思う私。まる
で編集者きどりだ。

「ど、どうだ？」

一通り読み終えた後、男の方を見やると、先程の剣幕とは打って

変わって神妙な面持ちだった。その表情には緊張がにじみ出ていて、いまにもそれが湯気のように顔から吹き出しそうだ。自分が編集者にでもなったかのような錯覚に陥ってしまう。

「正直に言つて、いいです？」

「ごくり、と男のつばを飲む音が聞こえてくるような気がした。

「あ、ああ、いい」

「じゃあ・・・」

私は、小さく息を吸い、批評を述べ始めた。

「まず感じたのは、ストーリーがありきたり。絵は結構イイ線いつていると思うけど、話がどこかで聞いたことのあるような話を寄せ集めただけみたいな印象を持ちました。それに、50ページの中の中盤の構成が間延びしていると思う。あってもなくても変わらないんじゃないかなって思うコマがいくらかあったし、フキダシのセリフもどこか説明口調に感じる部分があるし、作者が伝えたいことをもっと噛み砕いて表現しないと、読む人には伝わりにくいと思います。ページ数が多いから、その分伝えたいことをもっと凝縮させて後は読み手にとって読みやすいコマ割りを心掛けるべきじゃないかと。でもやっぱり一番気になるにはストーリーですね。一昔前のアクションマンガならこれでもいいのかも知れないけど、やっぱり今はもっと新しいものが求められているんじゃないかな。今までと同じものは出版社の人も求めてないと思うし、もっと荒削りでもいいから、このマンガになにか新しい熱っていうか、なんかそういうものを感じさせるような作品にしないと、きっと、審査員の目には留まらないんじゃないかな。って、私も素人だからよくわかんないけど」

と私が長々と批評を述べている間、男は一言も発せず、ただ黙々と私の声に耳を傾けていた。その顔は狼狽しているようでさえもあつた。恐らく自信作であつたはずだろうに、ここまでダメ出しされてショックを受けているのだろう。でも、私は心に思ってもいないことは口にはできないタイプだ。それに絵は本当にイイ線いつている

と思う。

「一番の問題はやっぱりストリー、ということか」

男はゆっくりと、言葉を吐きだした。そして、急に言葉を忘れてしまったかのように、しばらく呆然としていた。私もなんだか何も言い出せなくなり、夕暮れの中二人、ただ無言で向かいあっている時間が続いた。

私は、どうにかしてこの沈黙を破りたかった。どうあれ、この状況を作ってしまったのは私だ。自分が思ったままの感想を伝えるにしても、直線的な言い方でなく、もっとクッションを置いた言い方をしたほうがよかったのかも知れない。

「あの、もし良かったら、私にストリーを考えさせて貰えませんか？」

あ、思わず言ってしまった。男は、案の定口を丸くさせて啞然とした表情をその顔に浮かべていた。

「えっ？」

勢いで言ってしまった。途端、激しい後悔の波に襲われる。男はしばし考え込むような表情を見せた。こんなみず知らずの可憐な小娘にいきなり原作をやってもいい、などと言われておいそれと了承する人などいないだろう。相手も素人とはいえ、普通なら断られて然るべきだろう。

「おい、お前、今日ここに引越して来たんだよな」

突然、男が私に視線をぶつけ質問を浴びせる。

「あ、はい。今日から、です」

私はしどろもどろになりかけながらもそう返す。

「学生、か？」

続いて男は質問を続ける。

「あ、今は休学中、です。そもそも愛媛の大学に通ってたんですけど、どうしてもやりたいことがあって」

「やりたいことって何だ？」

男は矢継ぎ早に質問を重ねる。

「小、説家、になることです」

私は初対面の男、しかもこんな不審者極まりない風体の男に何をいきなりそんな大それた夢を告白しているのだらう。今さらながら自分が突拍子もないことをしようとしていることに少なからずの危機感を覚えた。

「そうか。俺も、漫画家になりたい夢を追いかけていたらいつの間にかもう三十路前だ」

まだ三十になっていなかったという事実には驚きを禁じ得ない。もう三十半ばはとうに過ぎていくものだと思っていた。とりあえず鬚は定期的に剃ったほうがいいと思う。

「本当は、今回の作品を出して、引つ掛からなかったらもう諦めようかと思ってたんだ。ずっと一人でやってきたけど、大した結果も出せずに、いつまでもフリーターのままでやっていける訳でもないしな。それに、確かに俺の考える話は古臭いのかも知れない。お前みたいな若いヤツの考える話の方がいいかも知れない」

男はどうやら私が咄嗟に言い放った提案に乗っかるうとしているようだった。私も自分で言ってしまった手前、やっぱり嫌ですとは今更言えない。

「おう、どうした。難しい顔してる。男は私が俯き加減でいることを察したのか、心配そうに声をかける。

「いや、でも、本当に私なんか考えた話でいいんですかね。その、絵を描くのつて、とても時間がかかるでしょう。もし、そうでもない話だったら、その時間がもったいないっていうか」

私が遠まわしに断りを入れたという気持ちをアピールしているのを知ってか知らずか男は遠慮なく口を開く。

「いやいや、俺もただの素人だし。それに原作の人間がいるなんて、ちよつとプロっぽくて面白そうだしな」

男は何故か少し嬉しそうだった。

「それに、あれだけの確な批評が出来るんだから、ただの素人娘じ

やないってことは俺でも分かる。お前、名前なんて言うんだ」

男は完全に乗り気だった。

「あ、あのお」

「名前は？呼ぶ時困るだろ」

「大向美智、です」

「ミチ、ミッチーか」

ミッチー？

「ミッチー、よろしくな」

そう言っただけで男は、右手をずっと私の右手の前に差し出した。私は手に持っていた原稿を左手に抱え持ち、結果空いた右手を致仕方なく差し出した。

「あの、そう言えばなんですけど」

「ん？」

さっきマンガを読んだ時からずっと気になっていたことだった。

「あの、ここに書いてる、浅田あんみつ、ってペンネーム、ですよ
ね」

男は笑顔で言った。

「そっだ。やっぱり少年誌に投稿するには子供受けする名前がいい
だろっ」

男は自信満々でそう言った。自身のネーミングセンスに確信を持っているようだった。

「まずはペンネームを変えたほうがいいと思います」

今日日の子供たちはそうそうあんみつなんて食べないと思う。

それにあんみつなんて単語を聞いたら益々お腹が減ってきたのでとりあえず私は原稿を浅田さん（と呼ぶことにした）に返却し、コンビニに行くことにした。すべてはお腹を満たしてからにしよう。

面倒臭いことを考えるのはその後からでも遅くはない。当の浅田さんは、自信のあったネーミングセンスに疑問符を突き付けられ、何か考えこんでいるようだった。コンビニに行こうとこの場を立ち去ろうとする私を見て、「おいちょっと」と追いかけてようとしたが、

なぜかたまたま地面に落ちていたバナナの皮を誤ってふんづけてしまい、盛大にすっころんでいたので放っておくことにした。

ともあれ、面倒なことになってしまったことは言うまでもない。

静かな町並みには幾らか不釣り合いに思えるどでかい看板のおかげで、コンビニは案外簡単に発見できた。そこで買ってきたお弁当とペットボトルのお茶を片手に、私は自分の部屋に戻ってきた。自分の城、というにはちよつとばかり見栄えは悪いが、この感じは！。

うん、悪くない。

誰も私に指図しない。実家の自分の部屋とは全く違う感覚。この高揚した気分も、もうあと数時間も経てば、不安や寂しさへと変化していくのだろうか。今はそんな前兆すらないけれど。

とりあえず、部屋のだ真ん中に置いたこたつの上に弁当を置いた。そして上着を脱ぎ、部屋の隅に空いているスペースに乱雑に投げ捨てて、こたつに入った。コンビニで温めてもらった弁当はぬくぬくとまだ温かさを保っている。保ってもらっていないと困る。

今まで生きてきた中で一番早いのではないかという程のスピードで弁当をたいらげると、早速、私は部屋の左奥に置いた、木造りのデスクに座った。デスクの上にはぼつんと置かれている鞆からノートパソコンを取り出した。私の夢を叶えるための必要不可欠なツールだ。早速起動させる。

スイッチを押すと、ヴイン、と、長い眠りから覚めるようにパソコンが短い声をあげた。真っ黒の画面に光が灯り、しばらくすると海を想起させる青が広がる、デスクトップ画面に変わった。壁紙は夜の星空だ。最初からパソコンの中に取り込まれている図柄だった。が、深い青色を見ていただけでなんとなく落ち着く。あまりごちゃごちゃしたものは好きじゃない。簡素なものでいいのだ。

私はデスクトップにあるワードのファイルをクリックした。一瞬

の後、画面は連連と文章の並んでいるページへ飛んだ。書きかけの小説だ。

今のところ、進み具合は全体の約七割といったところだ。これからもっと増えるかもしれないし、添削の結果いろいろと削ってもっと短くなるかも知れない。要は、書いている私本人ですら正確なところはわからないということだ。

わからない、ということとは小説家としては、全体の流れを構築できていないということなので、ダメなことなのかも知れない。けど、私は小説の「わからない」という部分が好きだったりする。人に伝えることが難しい感情のだけれど、なんとというか、先が読めない、どうなるか分からないことが、どのような過程を経て、やがて完成に至るのだろうか、そして完成したときには、一体どういうものになっているのだろうか。というワクワク感がある。

わからないということは、際限のない希望があるということと同義だ、と私は思っている。

体力には限界があると思う。どれだけトレーニングしても、恐らく、少なくとも私が生きているうちには、人は100メートルを5秒では走れないし、自力で空を跳ぶことはできないだろう。

でも、思考には限界がないと思う。私は頭の中でならどこまでもいける。なんにでもなれる。なんだってできる。それを具現化できることが、小説の可能性だと、私は信じている。

だから、私は私と会話する。頭の中では、どこまでも自由に、私は振舞うことが出来る。それは自分自身との戦いでもある。もっと面白いもの。もっと感動できるもの。もっと共感できるもの。そしてなにより、人が読んで幸せになれるもの。そんな物語を描くことができれば、私が生まれてきた意味も、少しは生まれるんじゃないだろうか、なんて。そんなことを考える。

なぜ、私が小説家になりたいのか、と言われると、まあ、よそ様の答えはおよそそんな感じなのだけども。

本音を言っと。

私の考えた妄想が物語になるということがとてもぞくぞくする。もしその妄想を人が見てくれたら、気恥しいやら嬉しいやらで、にやにやしてしまう。なんというか、ただの自己満足のようなものなのかも知れない。ていうか間違いない自己満足だ。

小説を書いている時は、他に何も考えなくていい。ただ、物語のことだけを考えている。一通り書ききった後は、脳がとても疲弊しているのだけど、その瞬間の私は、とても満たされている。こんなにも自分と向き合えるものなんて他にはない気がする。

小説には麻薬的な、何かがある。自分の世界に入り込んでしまう。それがもつたまらなく楽しいんだ。だから、私は小説家になりたいのだ、と、そう思っている。

もしも世界が明日終わるとしても、いつもと同じように生きていたいと思う。

今私が書いている物語の、登場人物の一人、主人公の彼女の台詞だ。三年後、地球が小惑星の衝突によってどうやら滅亡するらしい、というニュースを見た後の台詞だ。

主人公は、なぜそこまで落ち着いていられるのか、と問いかける。当然ながら世界は混乱し、人々はどうかして自分の命を守ろうと右往左往している。世界はもう滅亡しかけている。なんでそんなに平然としていられるのかと、主人公は彼女に問う。

だって、私は今が一番幸せだから。これ以上に望むものなんてないの。

彼女は、主人公の男と一緒に居られる今が一番幸せで、それ以上の幸せなど、世界のどこに行ってもみつからない。見つかるはずがない、と思っている。

でも、主人公はそんな彼女を一人残して、家を出て行ってしまった。彼は、怖かったのだ。

自分を自分以上に愛してくれる彼女が。世界の終末を前にしても、それでも一寸も変わらず自分を愛してくれる彼女が。なぜ、自分のことをそこまで想えるのだろうか。

主人公は、心の奥底の部分では、自分の命が三年後に失われてしまうことが怖くて仕方がなかった。彼女のように、今のままでいいなんて思えなかった。誰かの命を犠牲にすれば助かるのであれば、それが人として間違っていることであつたとしても、藁にしがみついてでもその誰かを蹴落としてでも助かりたかつた。

主人公は、彼女のおふれんばかりの想いに押し潰されていた。そんな重圧から、逃げ出してしまった。どこにもいくあてなんかないのに。

そこまで書いて、私はキーボードを叩く手を止めた。今日はここまで。頭がSOSのサインを送ってくる。私はかなり疲弊していた。時計を見ると、もう深夜の二時になっていた。約五時間ほど、液晶画面とにらめっこしていたのだ。

小説を書いている時は、時間の概念がどこかへ吹っ飛んでしまうようだった。本当に体力を使う作業なのだ、と改めて思う。

今自分が書いているものは、果たして人が読んで面白いと思ってくれるもののだろうか、と不安な気持ちに苛まれる。世の中で一体どれだけの人が小説を書いているのだろう。そして、その中で実際に何人の人間が小説だけでご飯を食べていけているのだろう。自分が才能に溢れているなんて偉そうなことはみじんこほども思わないけど、小説を好きであることならば、誰にも負けない自信がある。そう胸をはって言えるものは、私には他にない。

シャワーをさっと浴びて、髪を乾かした後、肌の手入れをする元気もなく、化粧水を顔にふりかけることも脳が拒否して、直行で布団にダイブした。直後、私は気を失うように眠りについた。

翌日の朝。

カーテンが開けっぱなしになって、朝の光が部屋に差し込んでいる。その光で目が覚めた。太陽にそつと起こされて、二日目の香川での生活が始まる。

そんな二日目。何故か私は自分の部屋ではなく、隣のお宅の部屋

にお邪魔していた。何故だ？

隣のお宅とは、そう、昨日ある意味で運命的な再会を果たした浅田あんみつ（30）、（ペンネーム、本名は浅田なにがし）の部屋である。私はどういうわけかこの男と、マンガを共同製作することになってしまった。それも半ば強引に決定されてしまった。朝の十時を過ぎた頃だったろうか、突然ドンドンとドアをノック、というよりは攻撃するような音が鳴り響き、何事かとドアを開けると、住所不定無職の男、という風体の男、いわゆるお隣さんが立っていた。私は有無を言わず連行される。訴訟を起こされても文句は言えないんじゃないですかと言いたい。まあ口約束してしまった手前、全面的に断ることもできない。強引に連れ込まれた部屋は、一昔前の漫画家の部屋のイメージを思い起こさせるものだった。

当の本人は一年位掃除していないんじゃないかというような、汚らしいという言葉が気持ちいくくらいにあてはまる、ポロ机に向かって作品づくりに没頭している。床のフローリング部分が確認できないくらい部屋は散らかっている。こんな部屋によく住めるものだ。息をするのさえ気がすまない。

「おい、何突つ立ってるんだ。とりあえず座れよ」

「あ、ああ、はい」

一体どこに人が座るスペースがあるのかと訝しんだ私だが、浅田さんが指をさした方角に、マンガの資料（と思われる写真や雑誌）がそびえ立った机と、おびただしい数の本やスクリーントンや雑誌に埋もれている椅子があることに気づいた。他に座る場所もないので仕方なくそこに座る。

「そこはな、アシスタントの席だ。まあでも誰も雇ってないし、そもそもそんな金はない。プロになってアシスタントが必要になった時用だ」

といって浅田さんは無謀な野望を語り、キラキラ目を輝かせながら原稿とにらめっこしている。

「あの、私は何をしたら」

おそろおそろ聞いてみる。

「もちろん、ネームづくりだ」

と当たり前のように言い放ったあと、浅田さんは、小汚い自分の机からルーズリーフの束を引っ張りだして、私に渡した。

「それに話を書いてくれ。もちろん、絵でな」

え？絵？戸惑いを隠せない。

「あの〜、それって、今からここでネームを描け、ってことですか？」

「そうゆうこと」

とって浅田さんは笑顔で頷いた。

ネーム、とはマンガ一話分のあらすじを、簡単な絵で描いた下書きのようなものだ。大体のコマ割りもここで決定する。なんでそんなことを知っているのかというと、私もマンガはよく読んでいたほうだからだ。中学生のころは実際にノートに描いていたこともあるくらいだ。もちろんネーム、のようなものも描いたことはある。私は絵が上手くはなかったからマンガ家になるのは早々に諦めたけど、まさかこんなところで再びネームを描くことになるうとは。人生何が起るかわからない。

「俺は新作のペン入れやつてるから、出来たら呼んでくれ」

浅田さんはこっちを一瞥もせずになんかそう言つと、黙々と、カリカリカリカリ音をたてながらペンを進めている。隣の建物で火事が起こっても気づかないような、ものすごい集中力だ。私がいてもいなくてもこの人はいつもこうなのだろうなと思うくらいに、それだった。ただひたすら真っ直ぐに、一心不乱に原稿に向かっている。この集中力で面白いマンガが描けなければ、ある意味もうどうしようもないのではないかとも思ってしまう。

さて、いやはや変なことになった。とはいえ話をつくる、という意味では小説もマンガも根本は同じだ。それも、曲りなりにもプロを目指している人間のために書くネームなのだ。ポジティブに考え

れば、小説を書く上で良い経験になるかも知れない。

とにかく、話を考えよう。ページ数は、長くて約50ページ。新人賞の応募作なら大体そのくらいのもだろうということとは昔どこかのマンガ雑誌にそんな記事があったのを覚えている。まず、その枠内に収まる話でなければならぬ。尚且つ、絵にして見栄えのする、躍動感のある話がいい。それでいて、読者の層に合わせて、わかりやすいもの。読み切りマンガに求められているものは、大体そんなものだろうか。

とにかく、まずは話の骨格を決めなくてはならない。そして早いところネームを完成させて家に帰らせてもらおう。というか自分の部屋で考えさせてくれたほうが落ち着くのだが。

「あの、自分の部屋で、ネーム考えたらダメですかね」
とりあえず、聞いてみる。

「ダメだ」

浅田さんは作業の手を休めることなく、口だけが私の問いに応じているという感じで返事をした。

「な、なんで」

「帰ってこない可能性もあるからな。俺はチャンスは逃さない。帰れるのはネームを書きあげてからだ。もちろん俺のOKが出てからだけだな」

これは監禁ではないのか。出るところに出て訴えれば勝てる気がする。一応女だぞ、私は。

仕方なく、私は再び真っ白の用紙とにらめっこをすることにした。早くこの真っ白を埋めなければいけない。でないと貴重な一日が潰れてしまう。時間は永遠ではないのだ。いつまでも一人暮らしが続けられる訳ではない。今までバイトで貯めたお金も、何もしなければ恐らく一年程で底を尽きてしまうだろう。1秒だって無駄にはできないのだ。

舞台はとある高校の何の変哲もないとあるクラス。主人公の男の

子はこれと違って何の取り柄もない、至って目立たない存在である。そんな彼も人並みに恋に落ちたりもする。その相手は同じクラスメイトであり、クラス委員であり、生徒会副会長でありながらスポーツ万能、成績優秀、容姿端麗、菜食兼備な完璧超人な女の子である。ああ格差社会。彼に出来ることといえば、ただ遠くの席から彼女のうなじを眺めていることだけだった。

ある日、いつものようにさりげなく遠目に彼女を眺めていた主人公だったが、何の偶然か、ばっちり目が合う。そしてにこやかにほほ笑む彼女。思わず視線をそらしてしまう主人公。淡い恋の予感か。いけない、自分は彼女に恋をしていい身分ではない。自分と彼女は月とすっぽん、美女と野獣、殿様と足軽、大トロとやりイカくらしいの差がある。

そんなことを考えていた矢先、教室の窓ガラスの向こう側から、迷彩服に身を包んだ男達が窓ガラスを突き破って現れる。バリンバリンに割れる窓ガラス。騒然とする教室内。自衛隊の訓練兵のような格好の面々が突如目の前に現れる。外にはへりの姿が見える。一体この平和な日本の高校に何が起こったのか。もしかして自分の知らない間に沖縄からこの近くに米軍基地が移転したのだろうか。そんな思いが主人公の頭をよぎる中、顔も明細色に塗られている兵隊達の顔を良く見ると、どこかで見覚えがあることに気がついた。よく見るとそれは、隣の二組の男子生徒達だ。

そしてへりがバリバリと音を立てながら教室に極限まで近付いてくる。そこから出てきたのは、これまた二組のクラス委員であり、この高校の生徒会長を務める男、ナルシスト臭全開の男、小笠原比呂氏だ。小笠原はへりからこちら側に飛び移り、ざわつく教室内に破れた窓から侵入してきた。本人は学校指定のブレザーに膝まである漆黒のコートという出で立ちで、本来ならそれは普通なのだが、この自衛隊パロディ集団のボスの立場での登場というシーンはなんと難しいものがあった。

「今日は三組に交渉に来た」

小笠原が颯爽と言い放った。

「そちらの彼女、富永里奈をうちのクラスに貰い受ける」

名指しされた彼女こそが、主人公が密かに想いを寄せる彼女であった。

前代見聞の、クラスメート強奪事件の始まりである。ここから、二組と三組の抗争が幕開けする。

「僕達のクラスには、君が必要なんだ。一緒に素敵なクラスを作り上げよう。そして、公私ともに僕の良きパートナーとなってくれ」

一見告白ともとれる小笠原の暴挙に、呆気にとられているのか、現場が理解できていないのか、三組の誰もその返答ができなかった。唯一、主人公を除いて。

「ふざけるな！お前なんかには彼女は渡さない！」

と、ここで交渉は決裂し、2つのクラスは抗争に突入する。

抗争といっても、不良の高校生のように喧嘩をする訳ではない。そこで、どうやって決着をつけるかが問題となるのだが、（ちなみに小笠原はこういうマンガではよくある話だが、実は理事長の孫なので、こんなワガママが通ってしまったりするのだ）二組と三組の代表者が、校内全体を使ったかけっこ（！）で決着をつけることに。もちろんゴールには物語のヒロインの富永さんが待っている。足が速いものが勝つ。単純明快、読者に最もわかりやすい形だ。

途中、理事長権限を乱用した数々の部活動の部員たちの邪魔が入るが、ぱつとしない主人公の勇氣ある行動に感銘を受けた、これまたぱつとしない三組のクラスメート達が、主人公を守るべく立ちあがる。最後の直線で小笠原とのデットヒートを制する主人公。そして勝ったその勢いであろうことか富永さんに告白してしまう主人公。しかし富永さんにはすでに彼氏がいたのだ。そのシーンはわざわざページを費やして（無駄コマと言われようとも）盛大にフラれるようにしむける。人生そんなに甘くはないのだ。

と、勢いでここまで描き込んでしまったがこんな話でいいのだろうか。とりあえずネームは完成した。とにかく浅田さんに見せてみ

ないことには始まらないので、完成したネームを見せるため、机につつぶしてひたすらペンを走らせている浅田さんの背中に声をかけた。

「あの、浅田さん」

カリカリ走らせていたペンを止め、浅田さんが振り返る。

「俺のことは先生と呼べ」

真顔でそう云い張るこの男。何の賞も取っていないくせに何が先生だ、と言ってやりたいところをぐっとこらえる。

「ぐ、せ、先生。ネームできました」

と私が唇を噛みしめながらそう言つと、浅田さんはほう、と目を軽く輝かせ、私の手から差し出されたネームの束を受け取つた。

ふむ、とかうむ、とか言いながらネームをぱらぱらとめくる浅田さん。まるでプロの編集者きどりか。何様なのですか？と言いたくて仕方がない。

「うん、ほお。うん」

一分ほどかけてネームを見終わつた後、しばらく沈黙する浅田さんが、そこにいた。

「ど、どうでしょう」

たまらず私が問いかけると、浅田さんはぎよろつと、私を睨みつけるように、実際本人に睨みつけているつもりはないのかも知れないが、無駄に力強い目力で私を見た。

「いいじゃねえか」

にやゝつ、と満面の笑みを見せながら、浅田さんは私に言った。

確かにそう言った。

「面白いな、これ。俺が言うんだから間違いない」

何度も賞に落ちてるあなたに言われてもなあ、と思っただけれど顔には出さない。

「後は、これに俺がどれだけ良い絵を入れられるかだな。よし、よしよし、ちよつとこれは、ひよつとしたらひよつとするかもな」

なにがひよつとすればひよつとするのだろうか。もしや、本気で

その話で賞を獲りに行くというのだろうか。大丈夫なのか、それか？自分で考えた話な手前、気が気でない。

「ん、ああ、ありがとう。もう、帰っていいぞ。後は俺の仕事だから」

浅田さんはネームを再読しながらそう言った。もう私は用済み、といった感じだった。

「原稿が完成したらまた連絡するから。次の新人賞の締切までもう1ヶ月しかないから、ギリギリになると思うけど」

浅田さんの眼の色は、より輝きを増している気がした。創作意欲が沸いてきているのだろうか。

「ほんとに、その話でいいんですか？」

私は聞いてみた。

「大丈夫だ。俺が言うんだから間違いない」

それがむしろ不安なのだが。

「まあ、完成を楽しみに待ってな」

と言って浅田さんにはっきりと笑った。

「まあ、浅：先生がそういうのなら」

本人が気に入っているようなのでよしとしよう。

と、いうことで私はそくさと浅田さんの、夢とゴミ、主にゴミにまみれた部屋を後にした。

そして隣の自分の部屋に戻った。

ボタン、とドアを閉めて、一呼吸。心に思う部分がある。なんだから、負けていられないな、という気がした。

私は両の頬を、両の手の平でばん、と叩いた。
「よし」

私は机の上に置かれてあるノートパソコンを開いた。良い小説を書くにはいい椅子に座らないといけない、という気がしたので、二万円で買ったどこぞの社長が座っているような感じの、ふかふかの黒椅子に座った。この部屋とは多少アンバランスな椅子だけれどそ

こは眼をつぶるしかない。

デスクトップにある、また別の書きかけの小説のフォルダをクリックする。ここ最近、なんだか勢いにノレなくて、ほとんど筆が進んでいなかった作品だ。でも、今ならすらすらと言葉が紡げそうな気がする。なんだかライバルが出現したような感じ。やらねば、というエネルギーが身体中を駆け巡っている感じだ。

目指す場所は違うけれど、同じように夢を追いかけてようとしている。こんな不景気の時代に。人は馬鹿だと笑うかもしれないけれど、私はそんな、自分や浅田さんのような人が少しくらいいてもいいんじゃないかな、と思う。そんな人がいないと、世界はきつと、もつとつまらないものになってしまっくんじゃないだろうか。

「不景気なんてふつとばせ」

そんな言葉を呟きながら小説を書いてみる。今日は文字の走りがいい。ノツてかけているのが自分でもわかる。こういうとき、いい物語というのは生まれるものだ。

「浅田さんには、負けない！」

無意識に、そんなことも口ずさんでいた。隣に住むライバルも、きつと無我夢中でペンを走らせていることに違いない。

どれだけ好きでいられるか。好きでい続けられるか。それが夢を追いかけるのに重要なことだと思う。

最初は好きでいても、それに深く関わることで、だんだんと嫌いな部分がでてくる。見たくなかったところも見えるようになってしまっ。それでも、それを乗り越えた上で、好きだと言えるもの。それは、自分が一生を掛けて追いかけていきたいと思えるもの。

私は、小説家になるのだ。

今なら、何時間でも、何十時間でもずっと物語を紡いでいけるよな気がする。もう何の音も聞こえない。ただ、私と、私が考える物語の、その2つしか、この世界には存在していないようで、心が、震える。

もう、何時間机に向かっているのだろうか。書き始めてからどれくらいの時間が経っているのだろうか。かなりの時間が経っているよ
うな気もするし、終わりが見えない、まだまだ書きはじめたばかり
なのかな、というような気もする。気分が高まっていて時間の間隔
が曖昧になっっているようだ。でも、時計を確認する時間すら惜しい。
今はただただ、物語を紡ぐことだけに集中したい。ほんの少しでも
それ以外のことを考えたくない。

私は今、確かに満たされている、気がする。

流石に手が痺れてきたので小休止を取ることにした。両手の指が
自分のものじゃないみたいだ。ひどくじんじんする。ギターの実習
をしすぎて手がつってしまった人の気分はこんな感じだろうか。俺
って練習熱心、みたいな。自己満足。笑。

お腹が空いていることに気がついた。小説を書いている時は全く
気がつかなかった。ランナーズハイのような状態だったのだろう。
我ながらなかなかの集中力だなと思う。

ピンポン、とお腹の減りの実感とほぼ同時に、ドアのチャイムが
鳴った。まさか浅田さんがもうマンガを完成させた訳でもないだろ
うが、他に誰かこの場所を知っている人なんていただろうか。友達
にも、特に親しい友人にしかこの場所は教えてない。第一、人に胸
張って自慢できることでもない。大学を休学してまで、他県にのこ
のこやってきて山ごもりに近いような状態で小説を書いているなん
て。

私はドアに向かって歩いた。ずっと座りっぱなしだったので、足
も痺れていた。足元がおぼつかない。

ドアを開ける。開ける直前に、もしかしたらNHKの集金か何か
かもしれないな、とも思ったが、もう手が止まらなかった。

開いたドアの向こうに立っていたのは、集金のおっさんではなく、
天使のような寺河さんだった。

「こんばんは」

「あ、こんばんは」

寺河さんは目を細めて柔らかな笑顔を私に向けてくれている。

「ごめんなさいね、突然」

「あ、いえ」

寺河さんは可愛らしいピンクのエプロンをつけていた。本人によく似合っている。そして両手には白色の、可愛らしい鍋を持っていた。

「良かったら、晩御飯一緒に食べない？ビーフシチュー作ったの」

正にお腹が空いているこのタイミングで現れるとは、本当に天使のような人だ。見ているだけで幸せな気持ちになれる人というものもあるものなのだなあ、と感心する。

「あ、ちょうどお腹が空いてたんです。嬉しいです。でも、いいんですか？」

「もちろん。いっぱい作っちゃったから、こっちがお願いしたいくらい」

笑顔だ。可愛い人だ。その可愛さを吸い取ってしまったらなんて考えてしまう。

「じゃあ、いただきます。あ、どうぞどうぞ」

「嬉しい。じゃ、お邪魔させてもらうね」

寺河さんはそう言っていると、鍋を引っくり返さないように、慎重な足取りで部屋に入ってきた。

そろそろと部屋の隅のコンロにまで歩み寄り、鍋をそっと置いた。「ふう、結構重かったの。良かった無事に運べて」

と言ってまた柔和な笑顔をさせる。なんだこの素敵オーラは。マインスイオンでまくりではないか。私もぜひとも、その自然な笑顔の発し方を教えて頂きたい。それだけで世界がもう少し明るく見えるような気がする。

勝手知ったる自分の家のように（大家なので大きくいえば自分の家であるが）立ち振る舞う寺河さん。私がぼっとしている間にビーフシチューを温め始め、手際よく、食器入れからコップを取り出し、薬缶にお湯を沸かし、お茶を準備している。実にてきぱきとし

ている。まるで私が他人の家に遊びに来ているかのようだ。流石に任せきりはいけないと思い慌てて席を立つ。

「あ、私やりますよ」

そう言う寺河さんは少し目を細めて笑い、

「いいのよ、座ってて。まだこつちに来て間もないじゃない。色々慣れないことが多くて疲れてるでしょ」

大天使のような優しさに返す言葉も見つからず、ついつい甘えてしまった。

確かに、私は疲れていた。しかし、その原因の大半は、小説を書き続けていたこと、それに隣の部屋で軟禁され、ネームを書かされていたことによるもののだが。

「もう浅田さんには会った？」

寺河さんは、温まったビーフシチューを注ぎながら、私に背を向けた状態でそう問いかけた。

「はい。マンガ家志望の人なんですよね」

「そうよ。とつても面白いマンガを描く人なの」

寺河さんは何の屈託も歪曲もなくそうまっすぐにいい放ったので、私は少しばかり訂正を加えたい気分になったが、寺河さんが発する言葉は、例えそれが間違いであったとしても全て真実に変えてしまふような力があるように思えたので、あえて何も言わずそのまま頷いておいた。

「さあ、召し上がれ」

テーブルの上には寺河さん特製のビーフシチューが美味しそうな匂いを部屋一杯に発散させている。私は、頂きます、と丁寧に手を合わせ、ビーフシチューをほおばった。

「どっつ？」

口の中に柔らかな牛肉の感触が広がる。

「お、美味しいです。とつても」

お世辞の必要が全くないほどそれは本当に美味しかった。

「よかった、お口にあつて。ビーフシチューなんて作るの久しぶり

だったから、ちょっと不安だったの」

「いや、本当に美味しいです。お嫁さんにしたいくらいです」と私が冗談で言うのと寺河さんはけらけらと笑っていた。

「面白いこと言うわね、みっちゃん。さすが小説家の卵ね」

いつ殻が破れて生まれてくるか知れないけれど、と付け加えようかと思つたが止めておいた。入居の書類の記入欄に、あなたが追いかけている夢を記入してください、という欄があったので、寺河さんは私が小説家を目指してここに来た事を知っている。

「まあ、目指すだけなら誰でもできますから」

と私は謙遜して自嘲気味に笑う。

「できるよ」

寺河さんはまっすぐな目で私を見つめる。どこにも逃れる道がない、それほどにまっすぐな目だ。私は、目を逸らしたい衝動に駆られたが、動けない。ほんの少しだけ、脳から簡単な指令を送ればいいだけのはずなのに、私の神経は急に動くことを止めたようだった。その視線は、驚くほど力強く、私の背中を押してくれているような類のそれだった。

「なります。なりたいです。小説家」

気がつくとは私はそのう言っていた。心の底から出てきた、本音の思いが、そのまま言葉に出たような感じだった。

寺河さんは、母親のような、全てを優しく包み込むような瞳で、私を見ていた。

「できるよ、みっちゃん。本が出たら、私三冊くらい買っちゃおう」

身近に自分の馬鹿げた夢を本気で応援してくれている人がいることに、言いようのない幸せを感じる。私はこのままでいいんだと、背中を押してくれる。どれだけ心強いことだろう。これで小説家にならなければ嘘だ、とまで、私は本気でそう思った。

寺河さんから素敵な差し入れを頂き、お腹も、心も満たされた私

は、その日はすぐに眠りに落ちてしまった。いつもなら、寝る前に最低でも一時間は小説を書くか、ノートにぱらぱらとプロットを書いたりしてから寝るようにしているのだけど、今日は何故かこの満たされた気持ち冷めてしまわない内にふとんの中に持っていきかけたのだと思う。

次の日、目が覚めたら、朝の十一時を過ぎていた。丸十二時間くらい眠っていたことになる。香川に来てから昨日まで続いていた、微熱のような、身体にまつわりつくような疲労感は、もうなくなっていた。寺河さんがビーフシチューを経由して取り除いてくれたのかも知れない。いや、きつとそうだ。そうに違いない。そんな確信めいたものがあつた。

カーテンをおもいつきり、勢いよく開けた。雲ひとつない、見事な快晴だった。

今日は、いい話が書けそうだ。

香川に来てから、今日でもう一カ月が過ぎようとしていた。八月も半ばを過ぎ、連日の酷暑を、ニュースキャスターが暑苦しい顔で伝えている。

私は、海にも山にも行くでもなく、ただひたすら部屋でパソコンに向かい、小説を書いていた。ある意味、なんと充実した夏休みだろうか。

私にとって、世界はこの小さな部屋の中だけで回っている。これ以上ないくらい最高の環境で、思う存分小説に没頭できる。そんな環境と心構えを手に入れることができただけでも、香川に来て正解だったと思う。これは、智久に感謝かも知れない。別に東京でなくても、小説は書けるのだ。

しかし、暑い。エアコンも毎日毎日つけるのも身体に悪いかなというのと、電気代が怖いなということ、極力扇風機で凌げる分は凌ぐようにして、どうしても無理な時だけエアコン様のお力を借り

ることにしている。

小説を書くには最高の環境であることに間違いはないのだが、たまには場所を変えたいくなる。プロットを作る時には、ファミレスのドリンクバーで八時間くらい粘ったり、近所の図書館（クーラーが効いている！タダで！素敵）にパソコンを持ち寄って書くこともある。ただ、夏休みの図書館は子供たちでごった返していることも多い。かえって集中できないこともあるので、当たりはずれはあるのだが。

とりあえず、外に出てみることにした。本屋にでもよって、それから図書館で書くか、ファミレスに行くか、もしくは家にまた帰って書くかを決めることにした。

適当な服に着替えて、外に出る準備をした。服は全て香川に来る前に地元で買ったものだ。こっちに来てから、服を買ったことはない。買うのはせいぜい食料品、生活必需品くらいの物だ。すっかり出不精になってしまった。地元にはいた頃は、それなりに買い物に出かけたり外に遊びに出たりしていたのだけれど。それでも、今の生活のほうが満たされていることは間違いなかった。

玄関のドアを開け、階段を降りた。夢人荘の正面入り口を、大家さんの寺河さんが掃除していた。

「あら、こんにちは」

寺河さんは自分の背丈程もあるような大きな竹箒を持っていた魔法が使っているような空飛ぶ箒くらいの大きさだ。

「こんにちは」

私は元気よく挨拶を返す。

「今日もいい天気ねえ」

さんさんと太陽の光が降り注ぐ。紫外線でもくらいえい！と太陽が攻撃してきているのではないかと思ってしまうくらいの照りっぷりだ。

「本当、暑いですね」

「水撒いたら少しは涼しくなるかなと思ったんだけど、すぐ蒸発し

「ちやうからあんまり効果ないみたい」

寺河さんは照れるように笑っていた。

「今日はおでかけ？」

寺河さんが道路に水（お湯になってるかも）を撒きながら聞いてきた。

「はい、部屋に閉じこもってばかりじゃ、カビが生えてきちゃいそうだから」

「そんなこと言ったら、浅田さんなんか今頃カビだらけよ」

「確かに」

私達は、二人でけらけらと笑いあった。

「ちよつと、ぶらぶらしてきます」

と私が言うと、寺河さんは気をつけて、と手をばたばたとふって見送ってくれた。なんだか良い一日になりそうな予感がした。

本屋に寄って、好きな作家さんの新刊が出ていたので、即購入した。ハードカバーは値段が高いし、最近は文庫本ばかり買うことが多かったが、好きな作家さんの本はちゃんと新刊が出たら即買うことにしている。本棚にさした時の重厚感がなんといえないのだ。それにハードカバーのほうが、ずっしりと重く、なんというか、小説を買ったぞー、という気持ちになるのだ。

その後、図書館に足を運んでみたが、案の定小学生で溢れていた。静かにしている、と言われても小学生には限度というものがある。全くの無音の空間という訳にはいかない、そこそこで、こそこそとくすくす笑いをする小学生達を見て、自分にもそんな頃があったな、と微笑ましい気持ちにもなったが、流石にこの環境でいいネタを思いつくような気がしなかったので、諦めて家に帰ることにした。

依然として照りつける太陽の下、私は一人てくてくと歩いていた。家族連れの姿が多く見られる。それもそうだが、今は夏休みなのだから。瞬間、孤独感に襲われる。誰も、私のことを知らない。そんな空間を歩いている、ということを変更して実感する。地元なら、街を

歩いていれば、偶然知り合いに会うことも少なくない。そんな楽しい偶然の起こる確率が全くのゼロなのだ。そう思うと、なんだろう。自分は、やっぱり一人なのだということを実感させられるというか、地元に戻ってしまいたい、という後ろ向きな気持ちに心が支配されそうになってしまう。そんな弱い自分が嫌になる。こんなところまで来て、まだ心が固まっていないのか、自分よ。もっと心に芯を通せ。

夢人荘から、だいたい歩いて一五分から二十分くらいのところに商店街がある。私はそこを歩くのが結構好きなのだ。なので、外に出る時は、なるべく商店街を経由してから行くようにしている。毎回、新しいお店を発見する喜びがあるのだ。それに、商店街を歩いていると地元の人になれたような気がして幾らか寂しさが紛らわされるような気がする。

でも、改めて見渡してみると、お世辞にも流行っているとはいえない。照りつける太陽の、容赦ない、空気を読む気の全くない日差しに生気を奪い取られてしまったかのように、商店街は閑散としている。

それでも、私は嬉々として商店街へと歩みを進めていく。おいでませ神楽坂商店街へ、と書かれている入口のゲートも、残念な世界遺産かと思えるくらい汚く、残念なオーラが満載、戦後間もない感が醸し出されている。

この商店街、神楽坂なんてお洒落な名前が付いている割にはお洒落感は無だ。不景気の煽りか、ところどころにシャッターが下り、灰色の占める割合がかなり多くなってしまっているところが、見る者に陰鬱な印象を与えてしまう。今更、こんな寂れた商店街の一角に店を構えようなんて人は、そうそういないのだろうなあと、そんな物思いに耽りつつ、私は商店街のど真ん中を闊歩する。

視界の一角に、ちよつとした人ばかりが出来ているのを発見したのは、商店街もそろそろ終わり、ぼちぼち出口が見えてくるかな、といったところだった。

こんな商店街でも流行りのお店というのものなのだな、と感心しながら、私はその人だけに誘われるように歩みを進めた。地元のテレビで特集でもされたのだろうか。それとも、昔ながらの味での商店街の最後の砦ともいえるような隠れた名店なのだろうか。私は期待に胸を膨らませながらその人だけに吸い込まれていった。

そのお店の名前は、八百八、上から読んでも下から読んでも八百八だ。狙ってつけたのかどうかは知らないが、こんな光景は小さい頃、なにかのアニメで見たことがある。八百屋さんだ。野菜を買うのはもっぱらスーパーの青果コーナーである現代っ子な私にとって、こんな絵に描いたような八百屋さん、ある意味感動だ。二十年ほど過去にタイムスリップしたような感覚だ。人並みを掻きわけ店内を窺ってみる。

天井からザルを吊り下げている。まさかあのザルの中に売上金を入れるという昔堅気なスタイルを現在でも貫いているのだろうか。もうなんか素敵だ。

そして、私の眼前にはさらに素敵な光景が広がっている。私と同じ年くらいの女の子が、「八百八」とロゴの入った黄色いエプロンを着て、頭には三角巾を巻いている。八百屋の一人娘なのだろうか。こんな寂れた商店街の一角で懸命に頑張っている。若いのに健気な世のちゃらちゃらした大学生達に見せてやりたい。でも、それよりもさらに見せてやりたい光景が眼前には浮かんでいる。

サルが、バナナを売っている。

私の頭がおかしくなった訳ではない。眼前では、確かサルが、サルがバナナを、お客様にお渡ししている。お会計はお嬢さんが担当しているようだ。お客さんはサルに直接バナナを渡してもらえてすごく嬉しそうだ。中には握手しているお客さんもいる。

八百屋で、サルが働いている。ブタでも、ゴリラでもない。サルだ。モンキー。ウキー。

そりゃ、人だかりもできるわ。サルがバナナを売っているのだから

ら。サルがバナナを好き、という話はそれはもう有名なことだが、私が生まれてから今まで、サルがバナナを売っている光景というものは一度もお目にかかったことがない。

気がつけば、私はその看板ザル（と形容する他ない）へと続く列に並んでいた。

おばさま方の背中越しで、しつかりとは確認できないが、そのザルはまだ子ザルのようで、とても小柄だったが、可愛らしい顔立ちで、おばさま方には非常に人気が高そうだ。

慣れているのか、迅速な手つきでバナナ房を渡している。おばさま方は準備万端、エコバックやら自前の袋を用意している。

「いらつしゃいませ〜」

ぼけっと並んでいた私は、いつの間にか二人の目の前にまで来ていた。

「あ、やつぱり、本物ですね」

まさか精巧なロボットという訳ではないだろうが、いざ目の前に本物のサルがいると、非日常的で上手く言葉が出てこない。

「あの、お客様、何をお買い求めですか」

サルの横でレジ打ちしている、私と同一年くらいの年頃の女の子は、私が何も野菜を持たずにレジの前まで来てしまっているの、少し戸惑っているようだ。

「あ、ごめんなさい。あ、ええと、じゃあバナナを一つ」

目の前にサルがいるからという理由だけで、バナナを頼んでしまった。別にバナナが食べたかった訳じゃないけど、場の空気というやつだ。私の後ろにもまだ何人が並んでいるので、あまりとるとろとしていく訳にもいかない。

「はい、じゃあ、こちら、180円になります」

女の子は手近にあるバナナを一房掴んでサルに渡した。サルは慣れた手つきでバナナを袋につめている。なんてしつかりしているのだろう。私は何故か自分が恥ずかしい存在に思えてきた。

「名前、あるの？」

私は唐突に聞いていた。

「あ、このコですか？」

女の子は小さな瞳を出来る限りまん丸く開いて喋っていた。私より10センチくらい身長が低い。ショートボブの髪型が似合う、可愛らしい感じの子だった。髪を茶色に染めてはいるけど、いまどきな感じはあまりしない。おじいちゃんおばあちゃんに好かれそうなタイプの子だ。

「もんちゃんです」

「もんちゃん」

私はサルの名前がもんちゃんだと判明した途端、そのあまりのベタなネーミングセンスがとても心地よく感じた。てらいのない、からっと晴れた日曜日のような素敵感に溢れている。昨今の、自分の子供に難解で、子供が成人した後のことをなんちゃって考えていない名前をつける親に聞かせてあげたい。

「いい名前だね」

皮肉でもなんでもなく、心からそう思って、それがそのまま口から出た。

「あ、ありがとうございます。なんだか嬉しいです」

彼女は少し困ったような顔をした。私がレジ前に陣取っているせいで後ろのお客さん達が大分詰まってしまっていたのだ。

「あ、ごめんなさい。すぐどくんで」

私はバッグから財布を取り出し、バナナの代金を彼女に渡した。もんちゃんが両手を合わせてこくりと頭を下げた。よくできたおサルさんだ。

「ありがとうございます。また来てくださいね」

「うん。間違いなくまた来ます」

そう言っ て私は八百八を後にした。

素敵なお店に出会えた。やはり商店街は魅力的だ。

サルが出てくる小説もいいかも知れない、と私は今書いている小説を根底から破綻させかねない登場人物をなんとか登場させること

はできないものかと模索していた。サルから買ったバナナをほおぶりながら。流石にサルから買っただけのことはあって、とても甘くておいしかった。

翌日の朝、私は今日が燃えるゴミの日だということに気づき、慌てて部屋中の燃えるであろうゴミを集めて回った。寺河さんの言うことには朝八時半頃には収集車がやってくるので、それまでにゴミを出さないといけないのだ。机の上に置きっぱなしにしていた携帯で時間を確認。八時十分。間に合う。収集場所は夢人荘の丁度真向かいにある電柱のあたりで、そこにゴミを置いておけば後は業者さんが回収してくれる、とのことだった。

私は自分の身体の3分の2くらいまでに膨らんだゴミ袋をぶら下げながら、部屋のドアを開け、階段をとんとんと掛け降りた。今日もいい天気だ。日差しが目に染みる。

もう電柱の下にはゴミ袋が10個以上転がっていた。皆さん早起床だ。私も手にもっていたゴミ袋をばん、とその捨てられゆくゴミ袋達の中に紛れ込ませた。さよならゴミよ。名残惜しさは一切ない。朝一のゴミを捨て終え、なんとなくやりきった感に包まれた私は、意気揚々と夢人荘の階段を登って行った。

ずるずる。

ふと、階段の向こう側、私の視界の先、二階の通路からと思われるが、ずるずると何かを引きずるような音が聞こえてくる。一体何の音なのだろう。

ずるずる。

その音は段々と大きくなる。私はなんとなく不気味な気がして階段の中腹で立ち止ってしまふ。

ずるずるずるずる。

なんだろう。この音は。何かこの先にアメーバ状の巨大なフナ虫でも発生しているのだろうか。私ったら朝イチからなんて気持ち悪い想像をしてしまうのだろうか。

ずるずるずるずる。

階段の中腹からしばらくその奥を見やっていた私の眼前に、現れたその音の正体は。

サルだった。

サルが、ゴミ袋を持って、いや、正確には身長兼ね合いも合っ
て引きずっている状態だが、自分の身体程もあるそれを、集荷場ま
で持っていかうとしている！

サルはゆっくりと、しかし確実に、歩を進めていく。慣れている
ようだ。毎週捨てているのだろうか。立派なサルだ。

サルは、私とすれ違う際に、ぺこりと一礼した。私も反射的に、
ぺこりと礼を返した。

私は、その後もその場に硬直し、ずっと、サルの背中を見ていた。
毛深かった。いや、そこはさして重要ではない。サルは、ちゃんと
道路に出る前に左右を確認し、それから道を挟んだ向こう側の駐車
場にとことこと歩き、ゴミ袋を置いて、振り返り、また左右をちゃ
んと確認し、とことこと歩いてきた。よくできたおサルさんだ。

階段をとことこと登ってくるサル。私は、そこでやっと、このサ
ルが昨日、八百八という八百屋で見かけたサルと同一人物、いや、
同一猿であろうという推測に辿りついた。中々世の中に、これほど
出来たおサルさんが、しかも同じ市内に二匹いるとは想像し難い。
サルは、私の横を通りすぎる前に、もう一度、改めて一礼をした。
私も、それに応じた。

私の脳内をある一つの疑問が席卷していた。

もしか、サルが暮らしている部屋があるのか？

そんなこと、ありえるはずがない。そもそもどうやって部屋を借
りなのだ。敷金礼金は？保証人は？身分証明証はあるのか？

しかしあのふわふわしたゆるキャラ感満載の大家さんである寺河
さんなら、サルでも入居をOKしてしまうかもしれない。それくら
いの懐の深さは併せもっていても不思議ではない。

とりあえず、私は尾行してみることにした。お隣さんだとしたら、

挨拶しておかなければならない。

私はサルの後を追いかけるように、速足で階段を駆け上った。

サルはまだ部屋に辿りついてはいなかった。とことこと、ゆっくりと歩を進めている。堂々とした歩きっぷりだ。

サルは、私の隣の隣の部屋、正面から見て一番右側の部屋のドアの前で立ち止った。そして、背伸びをして、器用にインターホンを押した。私はちょうど部屋の側からは死角になる、階段の影で、まるで木の陰からそっと見守る星飛馬の姉のような格好で、そっとその光景を見ていた。

数秒もしない内に、ドアが開いた。どうやらサルが一人（一匹）で暮らしているのではないらしい。ほっとしたような、ちよっと残念な気がしたような、複雑な気持ちだった。

ドアから出てきたのは、これまた昨日八百八で看板娘として活躍中のあの女の子だった。右手になにやら黄色いものを持っているのでなにかと思つてよく見てみるとバナナだった。

サルはバナナを素早く奪うように掴みとり、部屋の奥へと消えていった。野性の本能が垣間見えた瞬間だった。

その一瞬のやりとりの後、ドアを閉めようとした看板娘から、「あ」という声がかすかに私の耳に届いた。私に気づいたのだろう。看板娘はぺこりと一礼し、閉め掛けていたドアをまた開け放ち、そのまま私の目の前まで歩いてきた。足元にはピンクのハートマークのついたサンダルをはいている。可愛いけど私には似合いそうにないな、と意味のない分析を試してみた。

「あの、昨日、八百八にお買い物のにきてくれましたよね？」

看板娘は先日店内で見せていたそのままの感じの良さで接してきた。私とはかなりタイプが違う娘のようだ。

「あ、うん」

と私が答えると、娘は顔をほころばせた。

「やっぱり。私と同じ年くらいの人って、あの商店街ではあんまり見かけないから、印象に残ってたんです」

あれだけのお客さんの中で、よく私の顔を覚えていたなと感心していたが、それにはそういう理由があったのか。私の顔が美しくとても印象的だった、という訳ではないようだ。

「しかも、同じアパートに住んでるなんて、すごい偶然ですね！」
たしかに、それはすごい偶然だと私も思う。ただ、私にはそれより何よりも彼女に聞きたいことがあつて仕方がなかった。

「ねえ、いきなりこんな質問してアレなんだけど」
「はい？」

私は、こほん、と息を整え、次の句を発するエネルギーを蓄える。

「あなた、ええと」

「あ、私、濱田祥子って言います」

「祥子、ちゃん、ね。私、小笠原美智。ミッチーって呼んでね」

「は、はい。ミッチーさん」

「祥子ちゃん、あなたね。その若さで、ええと、今いくつ？」

「18歳です。来月19になります」

「そ、そう。おめでとう。ちなみに私は二十歳よ」

「あ、おめでとうございます。じゃあ、てんびん座ですか？」

「え、う、うん、そうだけど」

「私です！」

「そうなんだ。占いのときとかは、祥子ちゃんもおんなじように一喜一憂してるんでしょうね」

「でも、私あんまり占い見ないです。朝早くからバイト先の八百屋さんで働いてるので」

「そ、そう。若いのに大したものね」

「いや、全然、そんなことないです」

「それでね、祥子ちゃん」

「は、はい」

「ごくり、と喉が鳴る音が聞こえた。それは私にしか聞こえない音ではあるけれど、周辺一帯に響くような大音量のように、私の耳に木霊した。」

「なんでサルと一緒に住んでるの？」

やった。言えた。ちゃんと言えた。えらいぞ、私。大分話が逸れかけてしまったけれど、ちゃんと言えた。

祥子ちゃんは、まあきれいな丸顔だ。その丸顔の中にある小さな瞳が、精一杯大きく開いたような感じがした。

「少し長くなるので、よかったですら上がりませんか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7567s/>

夢人荘の人々（前編）

2011年4月26日11時55分発行